

研修会のお知らせ
26ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成27年5月1日発行

2015.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

5号

第37巻
No. 310



イトヒメハギ *Polygala tenuifolia* Willd. (ヒメハギ科 *Polygalaaceae*)

生薬

オンジ（遠志） 開花期の根を掘り取り、陽乾する。通常、木部を抜き去って皮部のみとする（肉遠志、遠志筒）。

成分

onjisaponinA~G, tetramethoxyxanthone, tenuifoliside A~D, polygalitol, β -amylin 等。

効能

鎮咳去痰薬として用いられるほか、精神安定や健忘症の改善に、帰脾湯や竜骨湯などの漢方処方に配合される。



生薬 イトヒメハギ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国東北部原産の多年草で、多くの細い茎を叢生し、葉は互生、長さ0.8～4 cm、幅0.5～1 mmの線形あるいは披針形の細い葉で、中国の本草書では葉が退化しているマオウ（麻黄 *Ephedra*）に例えられる小型の植物です。花は5～7月に開き、6月頃から次々と結実し、次々落下するため採種が非常に難しく、また発芽率の悪さが栽培化のネックになっています。

日本に渡来したのは定かではありませんが、正倉院（天平時代）の宝物として北倉に2束収納され、種々薬帳に「遠志并金四両 并袋」と記され、貴重な外来の生薬であったことが伺えます。以後は『本草和名』（918）に記載されている以外はあまり記録がありません。江戸中期になって『大和本草』（1709）に「木に似て小葉なり、しかも小なり。所々にあり、その葉小なり。小草と称するも宜なり」とあり、日本に自生するヒメハギ（*P. japonica*）ではないかと思われる表現になっています。『千金方薬註』（1778）には「一名小草。和名コハギ……所々山野に生す。葉は石血（テイカカズラ？）に似たり。三四月淡紫花を開く。大葉の者は葉黄楊に似たり」とあり、やはりヒメハギ又は他の植物を当てていると考えられます。『本草綱目啓蒙』（1803）では「ヒメハギ、コグサ、シバハギ」などの名を挙げ、「山野陽地に多し、……葉互生す、形圓小^{黄楊}葉に似て薄く、深緑色……三月葉間に深紫色の花を簇生す。胡枝子花に類して中に葎多し」とヒメハギの特徴を挙げています。また、「和産は皆根狭細にして薬用に堪えず」と記し、薬としては使用しなかったようです。他に国内に自生するヒメハギ属（*Polygala*）植物はヒナノキンチャク（*P. tatarinowii*）とカキノハグサ（*P. reinii*）がありますが、いずれも薬として用いることはありません。因みに、国内にイトヒメハギが伝来したのは近代になってからのようです。

中国における遠志の原植物について、陶弘景（456-536）は「形状は麻黄に似て青い」と述べているのに対し、馬志（宋代）は「茎、葉は大青に似てゐるが小さい。これを麻黄に比するのは陶氏が実物を識らないからだ。」と言い、李時珍は「遠志には大葉、小葉の二種類がある。陶弘景のいふものは小葉のものだ。馬志のいふものは大葉のものだ。大葉のものは花が紅い。」と述べています。ここで言う小葉のものはイトヒメハギで、大葉のものはヒメハギ又は寛葉遠志（*P. sibirica*）ではと推測されます。産地も多く、山西、陝西、河北、河南、山東、内蒙古、安徽、湖北、吉林、遼寧省など多くの省で生産されています。

主な薬効は『神農本草経』に「味苦温。欬逆、傷中を去り、不足を補し、邪気を除く、九竅を利し、知恵を益し、耳目を聡明にし、忘れず、志を強くし力を倍す。久しく服すれば身を軽くし老いず。」と記され、『名医別録』（502-536）には「無毒。丈夫を利し、心気を定め、驚悸を止め、精を益し、心下の膈気、皮膚の中熱、面目の黄を去るを主る。久しく服すれば顔色を好くし、延年す。」、甄権（唐代）は「健忘を治し、魂魄を安じ、物に迷はざらしめ、陽道を堅く壮んにする」と述べ、健康で聡明な老後を約束したかような薬です。李時珍（1518-1593）も「この草は服すれば能く智を益し、志を強くする。それで遠志なる名称があるのだ」と言い、初心を呼び戻し、志を遠きにつづ薬草という意味で名づけられたと言っています。（村上守一 記）